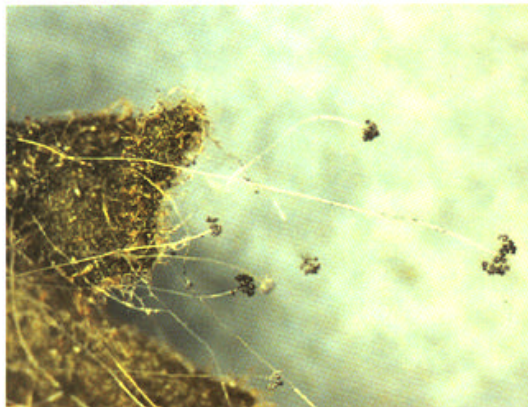


〈ペチュニアこうがいび病〉



花から発病し、茎葉が腐敗する。



罹病部に生じた病原菌の菌糸と単孢子性胞子のう。

〈ペチュニアこうがいび病〉

病原菌：Choanephora cucurbitarum (Berkely et Ravenel) Thaxter

1. 症 状

はじめ花に水浸状の病斑が急速に拡大して萎み、がく～茎葉に進展し、軟化腐敗する。多湿時には罹病部に汚白色の菌糸を豊富に生じ、やがて先端に微小な黒粒(単孢子性胞子のう)を多数形成する。乾燥にあうと病斑の進展は直ちに止まり、罹病部には萎れた菌糸が貼り付き、先端の黒粒が小形の虫糞状に付着する。

2. 生 態

本病は高温・多湿条件下で発生する。病原菌は、罹病部及び落下した花がらなどの有機物上で増殖し、単孢子性胞子のうを多数形成、これが飛散して伝染する。

3. 防 除

1) 過湿にならぬよう換気、灌水を適切に行う。 2) 被害株は速やかに除去し、花がらなどの有機物を処分して、施設内の衛生管理に努める。

4. 記 事

本病は1995年8月、真夏日が連続し、夕立などにより多湿となった北多摩の施設で発生した。